

沖縄少年会館の設計者・宮里栄一さん(87)に聞く

建物は世代超え 人の心育む

建築士の日

7/1

沖縄の戦後史を語る上で重要な建築物である沖縄少年会館(久茂地公民館)が、取り壊されようとしている。その現状から、建物の施主であり利用者でもある私たち県民、つくり手である建築士たちが学ぶべきことはないのだろうか。同館の設計者である宮里栄一さん(87)は、建物が造られ、生かされることの意義を問い掛ける。

寄付で建設ほかにも

沖縄少年会館は、戦後の米軍統治下で青少年問題への対策が叫ばれる中、子どもたちのために開かれた施設として、研修や訓練、教育相談、宿泊施設、本土の青少年との交流の場を設け、1966(昭和41)年に完成した。当時、多くの子どもたちが、鉄道模型やプラネタリウムに目を輝かせた。宮里さんによると、同館は当初、エレベーター付きの鉄筋コンクリート造5階建てを、施主の沖縄子どもを守る会(屋良朝苗会長)や、建設の支援に

分身を失うような思いがしまし、建設のために、多くの寄付を、たまたま県外の方々のあいつもなく、新・沖縄子どもを守る会が活用を提案しているにもかかわらず、残念でなりません。

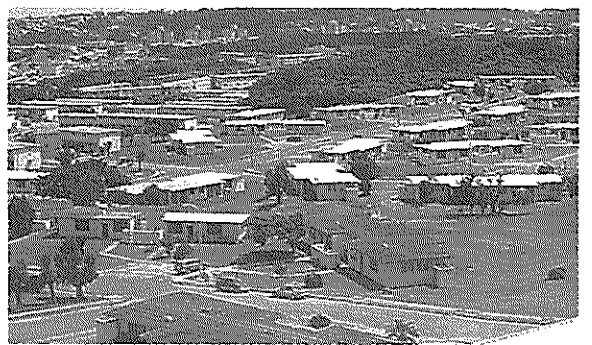
那覇市内には、同館のほかにも県外からの寄付で建てられた施設がほかにあった。1953(昭和28)年、ペルー県人会からの多額の寄付でできた那覇市久茂地の「子供博物館別名ペルー館」や、復帰直後ス

ポーツ施設が少なかった沖縄のために、兵庫県民の募金で奥武山運動公園内に1975(昭和50)年に造られた「沖縄・兵庫友愛スポーツセンター」がそう。それらも老朽化などで、保存・活用の道が探られないまま取り壊されてしまった。

安易に壊す傾向も

なぜ沖縄では、スクラップ・アンド・ビルドが短期間で繰り返されてきたのか。宮里さんは「多くの県民が戦後の貧しい中、耐久性が十分でない建物を造らざるを得なかった

天井スラブのコンクリートがはがれ、鉄筋がむき出しになった県内の住宅(左)。基地内の住宅(下)は築60年近くたった今も現役。その差は定期的なメンテナンスといえる。



事情があるのではないのでしょうか。そもそも建てるのに精いっぱいですから、補修費も確保できないし、こまめにメンテナンスができない。その結果、建物が早く老朽化してしまい、建て替えるを得ないという悪循環を生んでいるように思います」と推測する。

また沖縄の場合、用途が建設当初と変わったからといって、安易に壊しているように見受けられるとも。「建物の骨組みは丈夫に、内部は改装しやすい造りにすれば、短期間でスクラップ・アンド・ビルドを防げると思う。大規模修繕をへて今も現役の東京文化会館がそのことを示していますよ。」

宮里さん自身、築37年になる自宅の手入れをできる範囲でこつこつとしてきた。また「定期的にメンテナンスすれば、築60年近いコンクリート住宅であっても現役で使えることを、皮肉にも米軍基地内の建物が示している」と指摘する専門家もいる。

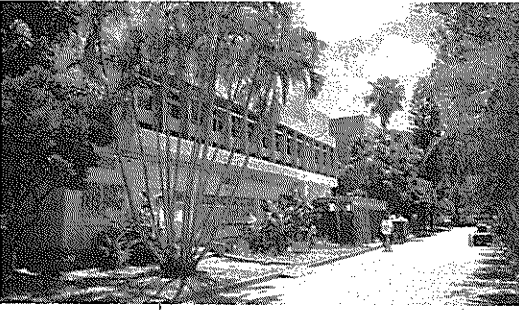
これから家を建てる人へのメッセージとして、「家の思い出が、親から子へ、子から孫へ引き継がれ、物を大切にすることを育みます。そのために『自分の財産は自分たちで守る』という意識を持つてほしい」と宮里さん。一方、つくり手である建築士に対しては「施主の身の丈に合った住まいの提案はもとより、建物を維持していく上で必要なメンテナンスをアドバイスしたり、その費用を建築当初から確保する取り組みをしてもらえたら」と指摘した。

住宅であっても公共施設であっても、施主やつくり手の、掛け替えのない思いや歴史が詰まっている。せわしい中であっても物を大切にすることを忘れないよう、沖縄少年会館の教訓から学ぶべきではないだろうか。

(我那覇宗貴)



「どんな建物にも生かすための術はあるはず」と語る宮里さん。那覇市首里金城町の自宅



沖縄・兵庫友愛スポーツセンター。戦後、県外からの寄付で造られたものの、老朽化により取り壊されてしまった(写真提供/福村俊治氏)